

美^み普^ふ教会史¹

—日本におけるもうひとつのメソジスト教会—

中井 幸夫

序

「慶賀すべきは、昨年から我が教団と日本美普教会とが合同したことであります。既に旧美普教会は我が教団の中部教区として、前の年会長小泉要太郎氏は教区長として、我が教区長会には最初から出席せられ、教師の交流も行はれて居ります。……単に日本美普教会が中部教区となったのみならず、名古屋中学も、成美学園（現横浜英和学院）も、我々の教団に加わったわけであります²。」

1941年3月、日本メソジスト教団第1回近畿地区年会において、日本メソジスト教会第6代監督阿部義宗はこう語った。

この監督告示のなかに、美普教会の日本での存在理由が見事にあらわされている。つまり、美普教会は名古屋と横浜の2つの教育機関を中心として、そのまわりのわずかな教会によって構成された、中部地方の家族的な教会であり、やがてメソジストの「監督制」のなかに吸収されるべき存在だった。

小論は以上の点について二部構成で考察する。第一部で美普教会について

¹ この拙論は、2002年9月に日本ウェスレー・メソジスト学会で発表させていただいたものを加筆訂正したものです。

² 日本基督教団史 資料集 第1篇『日本基督教団成立の過程』128頁

説明し、第二部では次ページの〔日米メソジスト教会合同図〕にあるようなアメリカと日本におけるメソジスト教会の合同の動きを、日本人の視点ではなく、外国人宣教師の視点で捉えることとした。このため、美普教会の中心的教育機関である横浜英和女学校の校長を30余年にわたって務めた女性宣教師、オリブ・I・ハジス（Olive I. Hodges）の働きに注目し、彼女の視点で合同問題を考察するものである。

第一部 美普教会日本年会

1. メソジスト・プロテスタント教会成立略史

ミス・ハジスについては後述することとし、はじめにメソジスト・プロテスタント教会（Methodist Protestant Church）について説明したい。

18世紀後半、イギリスからアメリカに広まっていったメソジズムはアメリカ合衆国の独立によってメソジスト教会として組織される必要が生じた。

1784年12月、メリーランド州ボルチモアに巡回説教者会議が召集された。およそ60人が出席し「メソジスト監督教会」の名の下に独立した教会を組織し、トーマス・コークとフランシス・アズベリーを監督に選出した。

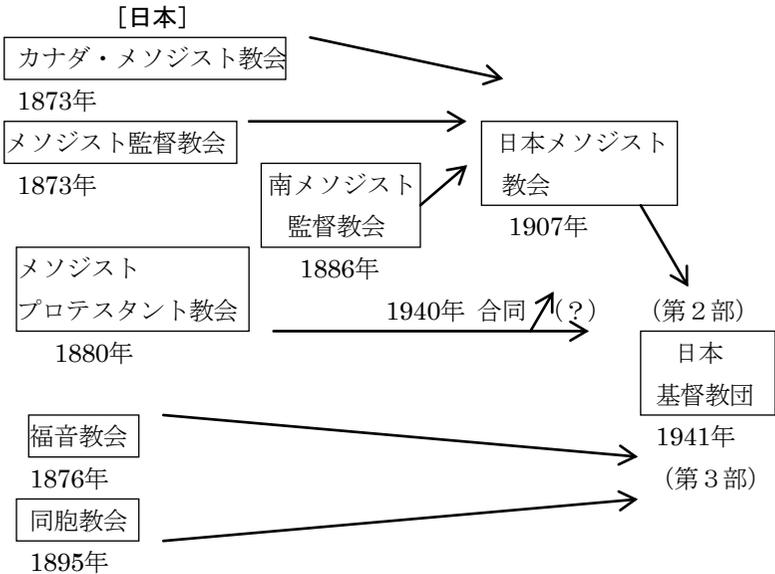
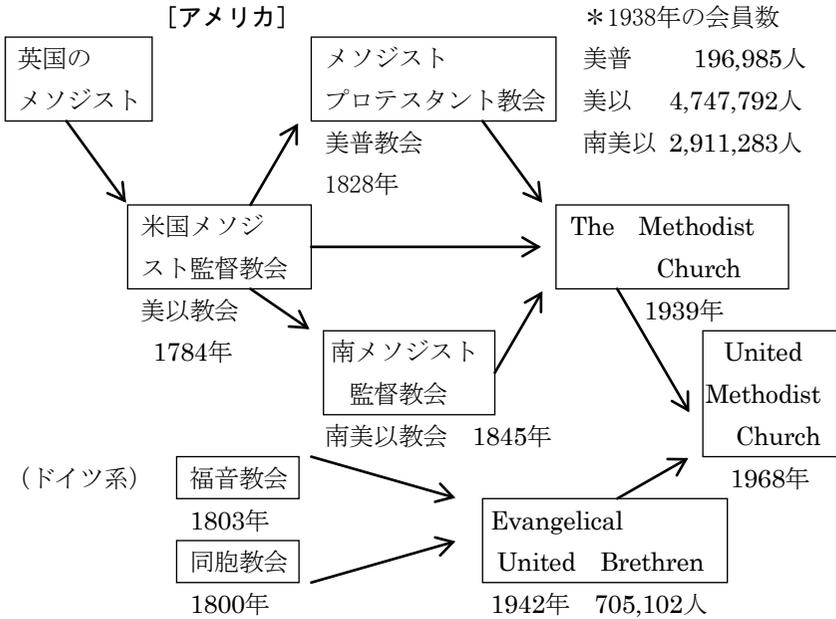
こうして組織された教会は、その憲法において、立法の権限は全部教職者の掌中にあることとし、平信徒や定住伝道者は参与することができなかった。時代の推移につれてこれに不満を抱くものが生まれ、1820年の総会にはこの傾向が強くなり、教会政治に信徒代表が参与できるようにする運動が起きた。

彼らは1824年の総会に制度の改革を求める請願書を提出したが、総会はこれを否定した。対立はいよいよ深まり、改革を求めた者は教会を追われ、ある者は自ら退会してさらに団結した。

1827年、改革者代表百余名はボルチモア市に集合し、1828年の総会に提出するための改革請願書の草稿を練った。しかし、総会では再び否決されたので、予備教会「アソシエイテッド・メソジスト教会」を組織した。

1830年にはボルチモア市に代議員114名が集まり「メソジスト・プロテス

〔日米メソジスト教会合同図〕



「メソジストプロテスタント教会」を組織した。

メソジスト・プロテスタント教会（以下美普教会と表記）は、信条・教義においては母教会と同じであるが、教会政治においては教職者も信徒も平等で、監督や長老を置かない。毎年1回年会を開いて教会全体の諸事について協議するが、そこに出席する議員は、教職者、信徒同数とし、議長は毎年年会にて選出され、任期は1年で再選されるのは3年までとし、それ以上は認められなかった³。

2. 日本への宣教開始

アメリカの美普教会は終始極めて小さな教派であって、1880年までに12万の信徒を数えるにすぎなかった。美普教会の宣教活動は、南北戦争が終わるまではアメリカ国内の辺境地を対象としていた。しかし、南北戦争後、アメリカのプロテスタント各派は外国への宣教に非常に関心をもち、積極的に活動を始める。

美普教会でも外国伝道のために献金するようになったが、自派としては具体的な活動にいたっていなかったので、献金援助は有名なドリーマス婦人を中心に超教派で創立された「アメリカ婦人一致伝道協会（The Woman's Union Missionary Society）」のインドにおける活動を支援することに捧げられた。

日本への献金は「アメリカ婦人一致伝道協会」を通じて1875年から恒常的に送られ、日本の少女たちが横浜のミッションホームの学校で勉学することを援助している。1879年までに17人の女学生が学ぶことが出来た。

こうしたなか、米国美普教会の婦人会員のなかに、貧困な家庭の少女が身売りされてしまうという日本の女子を取り巻く悲惨な状況から日本の少女を救おうという動きが起こり、美普内部に「婦人外国伝道会」が成立、1880年に日本へ宣教を開始、横浜に自派単独で女学校を設立した（後の成美学園、現横浜英和学院）。これが米国美普教会の日本での宣教のスタートである。

³ 『日本基督教団横浜本牧教会 100年史』より

3. 第一教会創立

1883年、米国美普教会から最初の教職資格をもつ宣教師として、フレデリック・C・クライン（Frederick C. Klain）牧師が派遣された。

クラインは来日するとすぐ夜間の英語学校を開き、宣教を始める。一方、1886年に前記の学校を「英和女学校」と「男子英和学校」とに正式に分離させた。

そして1886年7月11日、美普教会の日本における最初の教会を創立させる。（後の横浜第一美普教会、現日本基督教団・横浜本牧教会）（以下、教会はすべて日本基督教団）

翌年、クライン牧師は横浜での宣教活動を後任のトーマス・H・カルハー（Thomas H. Colhouer）牧師に任せ、自らは名古屋へ移る。クラインが名古屋を選んだ主な理由は、当時の名古屋が大都市部の中では比較的宣教の遅れていた地域だったからと思われるが、このときの彼の「選択」によって美普の宣教は名古屋中心になっていく。

1887年7月、名古屋に夜間英語学校を設立した。これが、後の名古屋中学（名古屋学院）になる。さらに同年11月、名古屋市内に教会を組織した。（名古屋第一美普教会、現広路教会）

以上のように、美普はあくまで学校を中心に宣教をしていることがわかる。教会はこの後、講義所（伝道所）としては増えていくものの、「教会」になるために必要なまでには会員数が増えていかなかった。

4. 日本年会

日本の美普教会は、法的には米国における母教会の総会のもとにある日本年会であり、毎年3月にこれを開いて教会政治を行なっていた。

1892年、第1回の日本年会が開かれた。

初代会議議長はクライン牧師。会場は横浜英和学校であった。

このとき、教会は横浜第一美普教会と名古屋第一美普教会のみ。年会員も

宣教師3名、信徒総代2名のみだった⁴。

一方、1907年に合同し日本メソジスト教会となるメソジストの主流3教会（メソジスト監督教会〈以下美以教会〉、南メソジスト監督教会〈南美以教会〉、カナダ・メソジスト）は、この前年の1891年に早くも3派共同の機関紙「護教」を創刊している。この「護教」によって3派はその後も緊密な関係が続き、後の合同の基礎が作られはじめる。美普はこの時点で「緊密な関係」から除外される。この点については第二部でも取り上げることとした。

美普はその後、1893年に静岡第一美普教会（現静岡草深教会）を創設した。しかし、その後はなかなか教会数は増えていかない。

1898年「静岡第二」を作るも後に「静岡第一」に吸収合併、同年「横浜第二」を立ち上げるも後にできる「横浜第三」に吸収されるといった具合である。

年会も1906年の第15回大会まで、横浜、静岡、名古屋の3箇所だけで開催されていた。その後教勢があがるにつれ年会開催地も広がるが、最終的に東京、神奈川、静岡、愛知、三重の5都県に限られ、「東海道を上り下りするだけの雲助教派」などからかわれたという⁵。

（美普の教勢については150頁の別表 [1939年の美普教会] 参照）

この時期の美普の活動について、長年美普教会の研究を続けた、青山学院ジャン・クランメル（John W. Krummel）教授は次のように語る。

「メソジスト・プロテスタントの働きは日本の社会のいろいろな方面に影響を与えました。……名古屋の美普の牧師丸山愿によって、明治24年10月の信濃地震によって両親を失った子供たちに対して特別な養子制度が設けられたことも忘れてはなりません。……また、宣教師モルフィ（Murphy）が名古屋で、春をひさぐ女性たちを自由にしたという際立った働きをしています。モルフィ宣教師の仕事は全国に起きた売春婦救済運動のきっかけを作り、数千の女性がこれによって人

⁴ 松永徳次郎編 『美普教会年譜』

⁵ 蒔田教会編 『メソジスト・プロテスタント（美普）教会その成立略史』の前文より

間の権利と自由を受け取ることができたのです⁶。」

しかし、美普の活動の中心は学校教育だった。

「日本でまず行ったことは、女学校を造ることでした。横浜英和女学校はまた、身売りされそうな女子を救う場所でもありました。本国アメリカの婦人外国伝道会は不幸な彼女たちに対して、奨学金を設けて授業料だけでなく、宿舎、食事、衣服も支給したのです。幼稚園を造ることも日本の子供の置かれた条件を改善していくのに大切なことでした⁷。」

だが、この学校の運営も決してうまくいっていたとはいえない。神学校、盲学校、夜間英語学校等いくつかの学校を設立したが、その後大部分が廃止され、最終的には名古屋と横浜の2校のみとなる。

横浜英和女学校だけに限ってみても、1880年から1904年までの24年間に校長が7人も交代している。そのほとんどが定められた5年の任期をまっとうすることができなかった。教育勅語の制定、内村鑑三不敬事件等の外的障害があったのは事実だが、それ以上に米国美普教会内の「外国伝道局」と「婦人外国伝道会」の間の意見の対立が最大の原因と考えられる。

横浜英和女学校の当時の卒業生数は年平均4名程度しかいなかった。

これをみてもわかるように、学校はきわめて規模が小さく、情勢によっては廃止もありえたかもしれない。

その不安定な状況のなか第8代校長に就任したのがオリブ・I・ハジスだった。

5. ミス・ハジス来日

ミス・ハジスは1877年アメリカのウェストヴァージニアに生まれた。両親とも美普教会の熱心な信徒だった。幼少の頃から頭脳明晰で、わずか16歳の

⁶ ジャン・クランメル『メソジスト・プロテスタント・ミッションに表れた明治時代の日本におけるメソジスト宣教の教え』1986年 横浜本牧教会創立100周年記念講演より

⁷ 前掲講演より

時ハンティントン市の教員免許を受けたほどだった。

1902年9月22日、25歳の若さで来日。1904年横浜英和女学校の校長に就任。その後30余年にわたって同校の校長を務める。

ミス・ハジスは単に横浜英和の運営を軌道にのせたという、一女学校の重要人物というにとどまらず、「日本の美普」にとって扇の要のような働きをした。

ここでハジスの足跡を追って、日本の美普教会について改めて検討してみたい。

6. 美普の宣教システム

美普教会は1880年の日本宣教開始時の学校に今日で言うところの幼稚園児を含めていた（白樺派の作家有島武郎は1884年、6才のときに4才の妹と共に入園している）。その後幼稚園としては休園したが、1908年に正式に再開（現横浜本牧教会付属早苗幼稚園）した。このため、この点をもって「現存する日本で最も古い私立幼稚園のひとつ」とみることもできよう⁸。

幼児の教育に熱心だった伝統はスタート時からのものといえる。そして、1897年 名古屋堅磐幼稚園、1907年 浜松常磐幼稚園という具合に美普の主要な宣教地域だった名古屋、横浜、静岡の3都市に幼稚園を作る。

美普はその後、平塚二葉、横浜英和第2（現横浜英和幼稚園）、小山、伊勢原と幼稚園を増やしていく。

ミス・ハジスは来日した翌年の1903年、名古屋堅磐幼稚園の代理園長に就き、1908年には横浜英和女学校付属早苗幼稚園を復活させ、さらに平塚の幼稚園創設に貢献する。

ここで、この当時を物語る、2～3の資料をみてみたい。

「英和は名古屋、浜松からの入学生が優勢でした。これは、学校関係の美普教会があり、ミッションの活動が前記2ヶ所に教会を持ち幼稚園を経営していたためです。

⁸ 小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師』キリスト新聞社 2003年 参照

寄宿舎で寝食を共にするうち、親交が自然に厚くなり、姉妹のように親しくなります。

婦人の先生たちはほとんど全部といってよいほど、寄宿舎におられたので、校内、校外の別なく個人的に折衝し、自分の問題も先生に打ち明けて相談し薫陶を受けることができました。

ミッションスクールという教育的性格上、上級になると教会へ行って日曜学校を教え、礼拝の音楽を奏します⁹。」

「幼稚園につき忘れてならない人に、ミス・ハジスがいます。この方の二葉幼稚園に対する物心両面の援助は多大なものでした。ことに幼稚園の教育面の指導に心をくだかれ、先生ご自身で養成された幼稚園教師を次々と送ってくださって、わが二葉幼稚園にとってはまさに大恩人の一人です¹⁰。」

「蒔田へ移転する2年前の1914年の生徒数は女学校69名、小学校83名、幼稚園100名である。塾のような家庭的な学校であり、ほぼ全寮制に近い小規模な学校であった。

(創立してから明治末年までに卒業生は83人しかいない。) ¹¹
ところが、これらの83名のうち洗礼を受けた者は67名で、全体の80パーセントがクリスチャンになった。1898年の資料では女学校の生徒数61人のうち給費生は46名、自費生は15名であった。当時の生徒の大部分はホームの寄宿生であり、大半の生徒がミッションの奨学生であった。しかも日常生活は宣教師たちと寝食を共にしていた。

卒業生の多くは横浜、名古屋、浜松等のミッションの施設に送られた。その関係からキリスト教会、幼稚園、学校に奉職した者が非常に多い¹²。」

⁹ 1912年横浜英和女学校卒業生の記録 『成美学園とキリスト教教育』1990年) 99頁

¹⁰ 『平塚教会 50年史』

¹¹ () 書筆者

¹² 『成美学園とキリスト教教育』111頁

以上のように、美普の宣教システムは名古屋横浜間の学校（幼稚園）と教会の相互交流に特色があり、ほとんど塾のような学校で育て上げられた生徒が卒業後に教会を支え、教会も生徒を送り込んでいた。そしてその中心にハジスがいた。もしハジスがいなかったならば、横浜英和女学校の運営は機動に乗らず、幼稚園も増えず、美普の宣教システムが成り立たなかったかもしれない。

7. 日本人年会長

50年間の美普日本年会で、2年以上年会長を務めた者は6名しかいない。彼ら年会長が実質的に「監督」に近い役割を果たしていた。6人のうち日本人は3人だけしかいない。ここでは序文に登場する、美普最後の（日本人としては事実上3代目の）年会長、小泉要太郎についてふれてみたい。

小泉は名古屋中学出身。東北学院でカルヴァン主義神学を学び、外国の神学校には留学せず、ことさら宣教師を退けはしなかったが、特に親交するといっているのではなかったといわれている。

美普という教会は、信仰的、神学的な面にはそれほど大きな関心を払った教会ではなかったといわれているが、別表のようにほとんどの牧師が青山学院と関西学院出身である中に、ただ一人カルヴァン主義神学校を出た小泉が長く年会長に選ばれたことにもそのことがよくあらわされている。そして、宣教師と距離を置こうとした小泉への支持が、そのまま昭和初期の美普年会員の総意を表していると思われる。

では、この時期の美普年会にミス・ハジスはどうかわるのか。

別表のとおり、美普教会の牧師は名古屋中学出身者が圧倒的に多いことがわかる。1939年の場合、兼牧も含め17分の13教会が名古屋中学出身牧師である。そして、このうち牧師夫人が横浜英和出身という教会が7教会もある。

（全員ミス・ハジスの教え子）

小泉要太郎夫人も横浜英和女学校の1907年のたった2人の卒業生の1人であり、ミス・ハジスが「寝食を共にして」育てた生徒だった。

年会を影で支える美普教会の女性会員に対する、ミス・ハジスの影響は非

常に大きかったと思われる。

以上のとおり、美普は名古屋中学と横浜英和の出身者たちによる、非常に家族的な教会だった。そのファミリーの中心にミス・ハジスがいることがお分かりいただけたと思う。

しかし、その「家族的」であることがその後の教会合同に影響していくことになる。

第二部 メソジスト合同

1. 明治のメソジスト合同

次にメソジストの教会合同について、主にミス・ハジスの視点で捉えてみよう。

ミス・ハジスが来日した1902年の時点で、日本におけるメソジスト諸派の合同の動きはかなり進展していた。よく知られているとおり、「美以」「南美以」「カナダ・メソジスト」「美普」のメソジスト4派に、「福音」「同胞」のメソジストに近い2派を加えた6派合同をめざしたが、ドイツ系の「福音」「同胞」が早々離脱、最終的に監督制の問題で美普も合同に加わらなかった。

以上の経緯については澤田泰紳「日本メソジスト教会史」¹³に詳しいため省略する。ただ、ここでは日本の教会の「土族性」についてだけはとりあげておきたい。

明治期における日本のキリスト教のリーダーはほとんどが元幕府側高級藩士たちだった。一例をあげると、

本多 庸一	津軽藩 重臣	日本メソジスト監督
井深 梶之助	会津藩 名門の上級武士の家	明治学院院長
小崎 弘道	熊本藩	同志社総長

¹³ 同志社大学人文科学研究所編『日本プロテスタント諸教派史の研究』教文館1997年

押川 方義	伊予松山藩	東北学院院長
海老名 弾正	柳川藩	同志社総長
平岩 愷保	(幕府切支丹調役)	日本メソジスト監督

この点に関し「日本キリスト教史」という本に次のような記載がある。

「彼らは明治期をリードするだけでなく、(本多を除いて)大正元年の時点で、井深58歳、小崎、海老名、平岩56歳と健在であった。

大正期に入って、彼らはあらかた人生の峠を越してようやく老境にはいるうとしていて、若いといえば柏井園が42歳、山室軍平が40歳というところである。……明治期のキリスト教徒は、「国家」を離れてキリスト教信仰を考えることができなかつた。あるいはまた儒教的訓練と教養のなかで育てられ、武士道を忘れずにいらなかつた・・・」¹⁴

では美普教会はどうだったか。美普は宣教のスタートが遅れたうえ宣教師たちの主導で宣教が進められた、ミッション依存体質がことさら強い教会だった。先に説明した1891年の「護教」創刊時点でメソジストの主流3派は、本多庸一(美以)や平岩愷保(カナダ・メソジスト)が活躍し、美普より日本宣教の遅れた南美もこの時期早くも吉岡美国(京都・町奉行の同心の長子、後の関西学院第二代院長)が表舞台に現れている。一方の美普は、この時期士族の有力者は一人もいない。明治期の主流派士族から見れば、まさに「雲助」だったのかも知れない¹⁵。

合同した3派の立場で見れば、青山学院ジャン・クランメル教授の意見が正当的解釈かもしれない。つまり、ポイントになるのは「数」の問題である¹⁶。

¹⁴ 海老沢有道 大内三郎『日本キリスト教史』日基督教団出版局 1970年443頁

¹⁵ その後の美普に士族がいなかつたわけではないが、明治期のリーダーたちに比べはるかに年少であり、世代が違った。つまり、明治期の士族のリーダーグループ(主流派)の仲間になり得るような日本人が美普にはいなかった。

¹⁶ 青山学院大学論集 ジャン・クランメル「The Methodist Protestant Church in Japan 1904~1912」

当時の4教会の会員数は、美以、南美以、カナダ・メソジスト3派あわせて10,558人。美普は1,125人。一方、他の有力教派教会は、日本基督教会18,460人、組合教会17,816人¹⁷。無理に美普を仲間に入れるため合同が遅れるよりも、少数の美普に見切りをつけて3派で合同し、他の2大教派に並ぶ大きな教派教会を作るほうが賢明であったと言える。しかし、その裏には本音として美普に対する「蔑視」があったのではないか。

この点に関してひとつ気になることがある。それは、1907年に制定された日本メソジスト教会宗教箇条である。

日本プロテスタント史の研究者土肥昭夫氏は次のように述べている。

「総則はメソジスト信徒として守るべき生活倫理を述べているが、ここでもイギリス、アメリカのものを日本の実情にあわせて改定されている。たとえば、「華麗なる衣服を着、金銀珠玉の飾りを用いる事」を「身分不相応の生活を為す事」と改め、これを禁止した。これは彼らの中に身分的階層意識があったことを示唆するだろう¹⁸。」

ウェスレーは説教88「服装について」において、「異なった身分の人々の間には、適当に異なった服装があつてよい。」とし「国家の最高の権威を与えられた人々」は「金や真珠や価高い服装で身を飾ってはいけない」というメソジストの規則の対象外であり、それ以外の「通常の (ordinary) クリスマン、つまり中層あるいは下層階級の人々」とはっきり階層を分けている¹⁹。このあたりは、いかにも王党派「トーリー」だったウェスレーらしい発想だが、イギリスのメソジストはこの「**Ordinary Christians**」で構成されていたわけで、日本メソジスト教会の場合、士族と平民で構成されている以上、ここに「身分不相応」という表現を使った彼ら士族のリーダーたちに「身分的階層意識」があったといわれても仕方ないであろう。この宗教箇条の変

¹⁷ 前掲『日本キリスト教史』461頁の資料 「The Christian movement in Japan」
1912年

¹⁸ 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版 1980年

¹⁹ 説教 88 「On Dress」6～8。なお、日本語訳は、『ジョン・ウェスレー標準説教』
第4巻 イムマヌエル綜合伝道団出版局 1974年 より引用。

更は、些細な事のようにみえて、実は非常に重要な問題を含んでいる²⁰。

2. 世界宣教会議

1910年エディンバラで世界宣教会議(World Missionary Conference)が開かれる。この大会は、世界中から1,700人が参加し、20世紀のエキュメニカル・ムーブメントのスタートと言われる歴史的な大会である。しかし、もっぱら宣教する側の大会であり、宣教される側の非欧米人は17人しか参加していない。日本からは、本多庸一(メソジスト)、井深梶乃介(改革・長老派)、原田助(組合派)、千葉勇五郎(バプテスト)の4名が参加。アジアを代表して本多庸一がスピーチをしている。

「欧米諸国が異邦人である我々のため宣教師をおくってくれた事は感謝の至りであるが、無能な者はかえって障害になるばかりであるから、今後派遣されるべき宣教師は、有能にして生活厳しく、人格的にすぐれた人物でなければならない。」

「その遣はされたる宣教師の縦し忠実に吾人を導くも彼等を送りたる本国が戦争の準備に汲々たるが如きは沙汰のかぎりなし」

「日本の如くにキリスト教迫害の歴史を有し、且つ国民性の強大なる国において特に国民化せる教会を打ち建つるの必要あり」²¹

この大会に日本の関係者で参加したのは、各教派の代表4名だけではなかった。ミス・ハジスがアメリカ・メソジスト・プロテスタント教会の代表として参加している。

彼女は本多庸一のスピーチをどのような想いで聞いたのだろうか。残念な

²⁰ 日本メソジストに限らず、明治期の日基教会、組合教会の士族リーダーたちもつ「身分的階層意識」の問題だけでなく、彼ら士族リーダーが、後発の教派(教会)に対してもつ主流派意識が、「日本基督教団のDNA」なのではないかといった点も「明治期士族性」から派生する問題として検討の余地があると考え。

²¹ 青山学院編 『本多庸一』1968年

がら資料がないため想像するしかない。

欧米人の目でみれば「侍」の国民性剥き出しの発言に見えなかったか。

本多は「押川君や私どもは腹の中から二本差しで生まれた身」²²と自ら語るように、その武士のような威厳のあるスピーチは、通訳する前から参加した西洋人たちにそれなりの感動を与えたと言われているが、筆者にはナショナリズムに偏りすぎ、ピントがずれているように思えてならない。

本多庸一とミス・ハジス。エキュメニカルな歴史的大会に日本のふたりのメソジストが参加した。日本のキリスト教史において2人の存在感は比較にならないほどの差がある。日本メソジスト教会初代監督、明治期の代表的教会政治家本多庸一と、私塾に近い小規模な女学校の校長ハジス。その2人はそのまま日本メソジスト教会と美普教会を象徴している。つまり、良きにつけ悪しきにつけ日本的な大きなメソジスト教会と、アメリカに依存しつづけた小さなメソジスト教会である。

ところで、この大会で日本の4人はどのような影響を受けたのだろうか。単に日本国内で教派をこえて合同すればそれでエキュメニカルだと考えたのだろうか。

エキュメニカルとは単に教派性をうやむやにしてひとつになることではない。「教派の違いを尊重し、違いを認め合いながら、共通の場所を見出し、共に歩んでいこう」という運動ではないか²³。私たちにとって何より重要なのは信仰理解の問題だが、信仰生活上のもう1つの問題である職制の問題もある。

日本からの代表の4人は、教会職制の一致なくしては不可能な合同問題を痛感した様子もなく、帰国後にただ会議における一致の方向だけを職制の問題に関する議論にふれずに報告した。

3. 福音、同胞との合同の動き

²² 東北学院創立 25 周年記念式の演説より

²³ 大津健一『エキュメニカル運動の課題』「福音と世界」2001年 5月号 33頁

「1913年美普と福音教会、同胞教会との合同の動きがあった」

(松永徳次郎編「日本美普教会年譜」)

資料は次のように語る。

「1月23日2時、3派の代表が築地神学校に集まり会合を開いた。美普から大儀見元一郎他6名、福音から7名、同胞から4名参加。大儀見を座長に3教会合同問題につきて交々意見を吐露せり・・・」(福音新報大正2年1月30日報より)

「名古屋通信 三派教役者の懇談会 去る25日市内にある美普、福音、同胞 三派の教役者は・・・次年度の年会を三派共同一場所に同時に開設する事、次年度内に三派連合の活動を試むる事・・・」等を決めた。(福音新報大正2年3月6日報より)²⁴

以上のように3派合同の動きがあったが、これは日本において独自になされたものではなく、米本国においてその気運があり、それを受けて日本においてもその議論が盛んになってきたものと言われている。

「福音教会」はドイツ系アメリカ人ジェイコブ・オールブライト (Jacob Albrecht) によってはじめられたもので、信仰理解はメソジストに近く、教会政治も監督制をとる。美以との違いはドイツ系ということである。

「同胞教会」は、ドイツからアメリカに渡った改革派のフィリップ・W・オッターバイン (F.W.Otterbein) がメノナイト派の伝道者マルチン・ベーム (M.Boehm) と組んで伝道していったドイツ系の教会で、農村伝道を得意としていた。教会政治は監督制をとる。

この2派は、美普とは信仰理解が近いだけでなく、アメリカミッションの支配が強いことも共通していた。

アメリカにおける「福音」と「同胞」は1942年に合同し、「エヴァンジュリカル・ユナイテッド・プレザレン教会 (EUB)」となる。そして、1968年にこれが「The Methodist Church」と合同し「United Methodist

²⁴ 以上について、中村征一郎『東金教会100年の歩み』 323頁

Church」(UMC)となる。(〔日米メソジスト教会合同図〕参照)

しかし、この合同の動きもおそらく「監督制」がネックになってまとまらなかったのではないと思われる。なぜなら1918年の米国美普教会からの美普日本年会あての書簡に、「他のメソジスト教会との教会政治上の差別を明確にする」よう指示されており、この時期まだ米国美普は「非監督制」にこだわっていたからである。

もしこの合同が成立していたなら、1940年6月の文部省教団設立認可基準(教会50以上、会員5,000人以上)を満たす教団が出来ていたというだけでなく、美普は神学校を持つことができた。

4. 神学校問題

美普は日本宣教初期には神学校を運営していた。しかし、1901年3月合同を目指すメソジスト系6派の間で「合同神学教育推進に関する議定書」が作成され(後に関西学院・南美以が辞退)、教会合同を待つことなく青山学院において5派共同の伝道者教育を開始した²⁵。つまり、美普は合同を前提に自らの神学校を廃止したにもかかわらず、その後1907年の日本メソジスト教会に加わらなかったため、神学校のない教派教会になってしまう。

ひとつの教派教会として神学校をもてないことは致命的なことといえる。

名古屋中学出身者が、青山学院(美以により創立)、関西学院(南美以により創立、後にカナダ・メソジストが参加)の神学部を出るという流れで、結局日本メソジストの助けなくては存在できなかった。(別表参照)

もし美普が前記の福音、同胞と合同したとすれば、おそらく福音教会の神学校の経営に参画し、大きな神学校に発展したであろう。そして何より、ミッションとの関係が強いことにおいて共通していただけに、この3派が合同していたら、現在の日本に「UMC日本年会」が存在していたかも知れない。

5. 青年、阿部義宗

²⁵ 澤田泰紳 前掲書

この当時の美普と日本メソジストの関係を知る上で興味深いエピソードがあるので紹介したい。

日本メソジスト教会創立の翌年である1908年、青山学院高等部を卒業した、後の日本メソジスト教会第6代監督阿部義宗は神学部へ進もうとしたが、入学希望者が本人一人しかなく、やむを得ず翌年まで1年入学を延ばすこととなった。その間すでに日本メソジスト教会初代監督の地位にあった伯父本多庸一の斡旋で、当時横浜日の出町にあった美普教会（現・蒔田教会）の横浜英語専修学校の舎監兼英語教員となった。阿部義宗の波乱万丈の長い生涯における社会人としての振出しであった。ここでは若い英語の先生として、結構楽しくやっていた様子が、自ら語る回想によってうかがわれる²⁶。

そして半年後、再び本多の指示によって、美普の名古屋中学校に、英語教師として赴任した。名古屋では美普の宣教師オービー宅に、後の美普教会牧師志知信一らと同居していた²⁷。日本メソジストに合同しなかった美普に監督が甥を斡旋し、美普はそれを受け入れている。不思議な関係といえる。

6. 大正、昭和期の美普（教会の発展と拝外主義）

1910年の「世界宣教会議」をうけ1913年にこの会の代表者R・モット博士（John R. Mott）が来日する。これを機に「全国基督教協議会」が発足、その成立に続いて3年間にわたる「全国共同伝道」が行なわれる。この時期日本の教会全体が教勢を大いにあげる。美普も10教会から20教会へと教会数が倍増する。一方教勢があがるにつれ自給独立の機運も高まってくる。

美普の年会も1916年に初めて日本人が年会長に就任。

米国ミッションは2年後の1918年になって「年会長の選挙権を年会に与える」と言う書簡を送ってきている。

²⁶ 本多記念教会 『阿部義宗小伝』

²⁷ 松永徳次郎編著 『日本美普教会・宣教師のはたらき』 29頁)

美普は1906年になってようやく、「年会記録正式用語に日本語を採用」するようになったくらい、とことんアメリカの教会だったが、この頃から少しずつ日本的な教会になっていく。

一方の日本メソジスト教会にも変化がおきる。その教会政治の特徴である監督制が少しずつ弱くなっていく。一例を挙げると、1919年10月の第4回総会における第2代監督平岩愼保は、監督の任期を8年から4年に短縮させようという動きと戦うことになる。彼はこのときの長大な監督告示で、この監督権を弱めようとする動きを「革命」と表現し抵抗する。しかし、結局平岩はこの大会で監督を辞す²⁸。

日本メソジストも教勢の発展とともに信徒の権利意識が高まってきたのだろうか。

筆者はウェスレーの信仰理解に信従する一信徒にすぎないので、職制についてはあまり深く検討できない。この点は専門の方には是非検討を進めていただきたい。

ただ、美普が日本的教会になっていくことに加え、日本メソジスト教会の監督制が弱まっていくことが、美普の存在理由をより薄れさせたことは確かかなようである。

美普の日本メソジストとの違いは、(1) 法的に米国の教会であること
(2) 監督制をとらないメソジストであることだったが、この2点が1920年頃にはかなり薄れ、日本メソジストと別の教会である理由がなくなってくる。

ところで、この時期横浜英和女学校も格段と規模を拡大していく。1916年山手から近隣の蒔田に移転。在校生、卒業生ともに大幅増となる。しかし、このことによって美普の特徴であった、家族的な宣教システムが崩れていく。

当時の卒業生で伝道者として活躍した陶山節子の次のコメントは非常に重要なので紹介する。

「4年間の大学での学びの後、母校英和の先生となったが、そのころは教師陣もだいぶ変わり、少々公立学校のように知識教育偏重になって

²⁸ 『浜松教会百年史』104頁以降

いた。寄宿舎も無くなったので、ハジス先生たちのような成熟したクリスチャン人格から直接感化を受ける生徒も教師も少なくなり、生徒数も数倍になっていたのに、家庭的塾風の学校から、他の学校並みに、先生の感化は及ばず、クリスチャンでない家庭で育った生徒がそのまま多数卒業してしまうことになった。これはおそらく学校創立の意図からは、かなりはずれてしまったのではないだろうか²⁹。」

ハジスは文字どおり生徒たちの霊的指導者（スピリチュアル・ディレクター）として、一人一人の生徒に、寝食を共にして、直接的な感化を与えて育て上げていった。そしてハジスの教え子たちの多くは、主に美普教会内で有能なキリスト者として奉仕していった。

しかし、学校の規模の拡大や寄宿舎の廃止によって、生徒への霊的な感化ができなくなっていく。美普の宣教システムのひとつの中心が、横浜英和女学校からハジスに育てられ、宣教の地に旅立っていった女性たちだったことを考えると、美普特有の名古屋・横浜間の宣教システムが、学校の規模の拡大によってやがては崩れていくことを意味する。

この点でも美普の存在理由が薄らいでいく。

一方、自給独立の動きは排外主義と表裏一体となって加速していく。

米国の排日法制定（1924年）、大恐慌（1929年）を原因とする日本年会への補助金大幅削減（1934年）などにより、日本の美普のアメリカ母教会への反感は高まっていった。

1938年「在日メソジスト・プロテスタント宣教師社団」を「日本美普教会員社団」と改名。（これによって米国母教会の資産を日本年会に移す。）

そして同年9月、国全体の反米感情に対する考慮もあり、ミス・ハジスは30数年間勤めた横浜英和の校長を解任される。

7. アメリカにおけるメソジスト合同

²⁹ 『90年史余話』横浜英和学院・丘光会 1922年卒業 陶山節子

1910年のエディンバラの世界宣教会議後、アメリカでもエキュメニカルな動きが活発になる。美以、南美以、美普の代表が1916年に合同のための会合をはじめた。その後約20年の歳月を経て、1939年4月3つの教会は、「The Methodist Church」として合併した。

こうして「アメリカ美普教会」は教派としての歴史を閉じる。（ただ、海外宣教地である日本やアジアの国々に「美普」が単独で残されることになる。）

1939年4月カンザスシティのメソジスト・チャーチ合同大会に校長解任後のミス・ハジスも出席する。

アメリカのこの合同大会について、ハジスは帰国後横浜英和女学校の生徒向けに次のようにコメントしている。

「一番良かった経験はメソジスト教会の合同の会があり、わたしも出席したことです。100年程前アメリカにはメソジスト教会は一つしかなかったのですが、そのうちに普通の信者もいろいろの権利を持ちたいということをやかましく言うようになったので、その人たちはメソジスト教会から追い出されて新しい教会をたてました。それが私ども美普教会です。今でも小さい教会ですが今から20年ほど前に追い出した母教会が謝って、自分たちのほうの制度もそうなったから帰って来いといいましたが、その時はメソジスト教会は前と違って南北にわかれていて・・・³⁰」

やさしく書かれた文章だが重要な部分が2点あると思う。

第1点はメソジスト監督教会の政治制度が美普と同じようになったと認識していること。確かに新しくできた「The Methodist Church」は監督制をとってはいるが、5地域に分割された地域会議は、半数の教職と半数の信徒によって運営されることになった。その後1968年に合同した「UMC」においても、General Conference（全メソジスト総会）は総数が1000名に限定さ

³⁰ 『わたしたちのハジス先生』成美学園（横浜英和学院）1965（「成美学園時報」1939年）

れるが、半数が教職、半数が信徒とされる。

合同したメソジスト教会にメソジスト・プロテスタント教会の与えた影響は決して小さくはなかった。

第2点は1828年の美普の分離は、民主化をやかましく求めすぎて追放されるべくして追放されたということ。筆者は本来メソジストは監督制をとるべきであると考え。ウェスレーのめざしたメソジズムは監督制をとってこそ実現するのではないか。ただし、18世紀にとるべき監督制と20世紀にとるべき監督制は当然違ってくる。時代に合った監督制をとればいいわけである。

1828年の美普は時代を先取りしすぎてしまった。追放されて出来た美普の教会制度は本来のメソジズムからやや逸脱したものだった。1939年にやっと本来のメソジスト教会に戻ることが出来た。それも、その時代に合うかたちに変えることに貢献して。

では、日本の美普はどうだったのだろうか。

8. 昭和のメソジスト合同

1936年アメリカの合同の動きを見て、日本の美普教会内に「米国母教会合同に関する調査委員会」が成立した。

しかし、1939年カンザスシティでの合同大会に出席した当時の年会長小泉要太郎は、「日本においては諸事情のため、合同に今しばらく時間がかかる」旨説明。日本メソジスト阿部義宗監督が「日本の美普教会内でその合同機運が熟していないのは遺憾である」（日本メソジスト教会第9回総会監督告辞、1939. 10）と発言するほど、日本美普は合同へと動かない。

美普は合同の条件として、①美普としての年会を合同後も続けられること、②財産の管理は当面別々に行なうこと、等要求し、日本メソジストとの合同に積極的にはみえない。

一方、日本メソジスト教会阿部義宗監督は、前記の「遺憾」発言に見られるようにメソジストの統一に非常に積極的にみえる。この点について少し検討したい。

両教会が合同しても日本メソジストにはメリットはほとんどない。合同の

メリットをしいてあげれば、名古屋中学と横浜英和女学校という2つの主要都市におけるメソジスト系教育機関を仲間にできることくらいで、美普の20弱の教会や数十の伝道所は資産的にはマイナスと考えられる。美普はミッション依存体質が強く、ミッションの援助なしで到底自立できない教会だった。では、日本メソジストの当時の実情はどうだったのか。

日本メソジスト教会は、法的には日本の教会だが、依然としてミッションの援助で成り立っていた。この点について、土肥昭夫氏の本を引用する。

「日本教化という構想とアメリカの教派組織の直輸入によって、この教派は、教会の負担能力をこえる、多様の教職をもち、また複雑な教会機構を備えていたので、これを支えるために多額の経費を必要とした。たとえば、38年度の教会経費は、通常会計、諸局の会計を合わせて約23万円であり、ミッションの援助は約10万円であった。そして自給教会109、伝道局補助教会66、ミッション補助教会95となっている。（「日本メソジスト教会第9回総会記録」1939年10月）40年8月以降ミッションより自給独立することが、至上命令として要求されたとき、監督たち執行部の悩みはこの問題だった³¹。」

日本メソジスト教会が「永久に不変な標準のひとつ」（教会条例第19条）としてあげていたウェスレーの標準説教も、監督制という教会制度もかなぐり捨てて、日本基督教団への「無条件合同」へ向かっていった大きな理由のひとつがこの財政の問題だった。

では、財政的にメリットのない美普の吸収合併を進める阿部義宗のめざしたものは何だったのか。それは、決して青年時代に英語教師として過ごした美普への個人的な想い入れを満足させるための吸収合併ではなく、ウェスレーによるメソジストの監督権(episkope)による、日本のメソジストの統一であったと考えるのが自然ではないだろうか。

本来、「監督制を取ろうとそうでない政体を取ろうと、メソジズムの

³¹ 土肥昭夫 『日本プロテスタント教会の成立と展開』 日基督教団出版局 1975年
231頁

episkopeはウェスレーに由来するのであり……」³²単なる「意見」の相違により日本に複数のメソジスト教会があることはおかしいことだった。

1907年の日本メソジスト教会の合同、創立は、美普を取り残した、いわば「不完全な合同」だった。阿部義宗は、伯父であり日本メソジスト教会初代監督であった本多庸一のなし得なかったメソジストの完全な合同の実現を願っていたのではないか。

これに対し、美普はどうだったのだろうか。

美普教会側の当時の本音は次のとおり。

「……少々の苦痛、不如意、時には屈辱的に考へらるる向もあらうが大成を期してまず日本メソジスト教会に合同し……」（合同直前の1940年9月17日臨時年会における年会長報告）

ではミッションから離れた美普が、この時期日本メソジストと合同しなかった一番の理由は何なのか。

美普の存在理由は「米国美普教会日本年会」という法のもとにあった。ところが、ミッションから離れていくにつれ、日本美普の独特な制度である名古屋、横浜間の家族的宣教システムが存在理由になっていく。土肥昭夫氏の次の記述は注目に値する。

「日本において教派的性格が内実としてとのいにくい原因として、……教会法の認識の薄弱さがあるだろう。……教会は法的性格をもつにもかかわらず、法ならざる法でうごくということになる。……日本の教会の場合、法秩序とその精神があいまいにされ、もっと違った要素が教会を動かしてきた。たとえば、特定のカリスマ的指導者の支配関係とか派閥的な情意投合とか同族的情緒的集団意識といったものである。」³³

日本の美普は、昭和になってからアメリカ美普教会とのかかわりが薄れ、教派的な信仰理解が曖昧になり、彼らのなかにメソジズム自体が薄れていく。教会政治についても、美普単独ならどのような政体でもよかったのかもしれない。信仰理解より、教会政治より、彼らにとって大切だったのは、美普の

³² 林 牧人「日本メソジスト教会における監督制の背景」『ウェスレー・メソジスト研究』2（2001）

³³ 土肥 前掲書 203頁

まるで名古屋中学同窓会的な「同族的情緒的集団意識」だったと思われる。

9. 具体的合同の動き

日本メソジストとの具体的な合同の動きは、1940年5月29日茅ヶ崎のミス・ハジス邸における第1回(美普) 合同交渉委員会から始まる。ここでは「日本メソジストと合同すると否とにかかわらず互いに研究懇談する」ことを決めたにとどまる。

しかし、1940年6月の教団設立許可基準内示により信徒数3,000人弱の美普は他の教会と合同しなければ存続できなくなる。合同への動きは加速する。

6月25日	第2回(美普) 合同交渉委員会 「合同に向けて進むこと」を決議。そして、
7月11日	第1回日本メソジストおよび美普合同交渉委員会開催
9月13日	第3回(美普) 合同交渉委員会
同日	第2回日本メソジストおよび美普合同交渉委員会
9月17日	(美普) 臨時年会において日本メソジストとの合同を決議
10月14～16日	日本メソジスト第4回臨時総会で美普教会との合同を承認

ここに「日本メソジスト教会」と「美普教会」は合同し、日本のメソジストは宣教開始67年にしてはじめてひとつになる。

開戦直前の暗い世相の中、日本のメソジストをリードする監督阿部義宗にとって、まさに「慶賀すべき」喜び祝うべき瞬間だ。

ところが、ほぼ同時期に日本基督教団創立のための合同準備委員会も会合を重ねられ、日本メソジスト教会と美普教会のこの合同は後になかったこととされる。

しかし、法的には遡って合同を取り消されるとしても、現実には両教会の合同は進行していった。

前記の第4回臨時総会で日本メソジスト教会は大幅な機構改革に踏み切った。従来総会、年会、部会、四季会を廃止、毎年の総会、11教区年会の開催、監督の下における中央委員、幹事、主事および教区長の設置を決めた。従来

の教職任命制も廃止された。それは「殆んど破天荒とも言ふべき機構の大改正」³⁴であった。

美普はここで、旧教派丸ごと新しく出来た「中部教区」となり、年会長小泉要太郎がそのまま教区長の座に着く。つまり、東京にある美普教会も、横浜にある美普教会も、静岡にある美普教会も、いずれも日本メソジスト中部教区の教会で、旧美普以外の教会は「中部教区」には入らず、今までどおり「美普」としてのまとまりを維持できるわけである。

こうして当初からの要望である、合同後も美普としての年会を続けさせることに成功する。

メソジストの統一を目指す阿部義宗に対し、自分たちの年会を頑なに守ろうとしてあれこれ条件をつけてくる美普の様子には、一種の「ずるさ」すら感じられる。この点で、美普は言葉の正しい意味で「雲助」だったのかもしれない。

しかし、美普がどれだけ「美普」としての独立を守ろうとしても、確実に阿部義宗の監督権の中に組み込まれていく。

その一例として、静岡県内の教会の統合例を挙げることにした。

1941年3月、日本メソジスト大宮教会の吉原講義所を大宮教会から分離し、旧美普鷹岡教会と合同させ、大宮教会の会堂と牧師館を分離、牧師館は大宮に残し、会堂を旧美普鷹岡教会敷地に移転させた³⁵。他に例を見ない会堂移転だったが、これは美普が日本メソジストの監督権にはいっていなければ成り立たないことだった。

日本における美普もこうして日本メソジスト教会に統合され、本来あるべき監督制に立ち返った。このまま数年も経てば、阿部の手腕により「美普＝中部教区」は解体され、日本メソジストの中にとけ込んでいったであろうし、それが美普の進むべき道だったと筆者は考える。つまり日本の美普はアメリカの場合と同様に、メソジストの監督制を民主化させることに貢献し、「聖なる一つのメソジスト」になるべく、消滅すべき存在だったのではないか。

³⁴ 阿部義宗「監督室より」「日本メソジスト時報」1940. 10. 25 前掲の『日本基督教団史』資料集第1篇 115頁

³⁵ 『吉原教会百年史年表』10頁

しかし、統一を成し遂げた日本のメソジストもすぐに終焉の時を迎える。1941年6月、日本基督教団創立。美普は日本メソジストとは別の教会として、日本メソジストと共に日本基督教団の第2部に入る。

部会制によりそれまでの教会政治を維持するかに見えたが、「当分の間続く」と思われたこの部会制も1年で解消、日本のメソジストたちはここに監督制を失ってしまう。

日本におけるメソジストの統一は、曖昧なまま、激動の昭和史の中に埋没してしまった。

10. ミス・ハジスのその後

ミス・ハジスは1942年9月、敵性国民として強制収容所に入れられ、1943年の最後の日米交換船で帰米させられる。

1945年より日系アメリカ人のワシントン宿舎の管理者として、日系市民の住宅、就職の世話に当たる。ハジスのアメリカでの活躍をワシントンポストが長文の記事にした。その中で次のように紹介している。

「彼女は軍隊制度は別として日本人が好きであるけれども、きわめて厳格なメソジスト教徒であると同時にまさしくアメリカ人である³⁶。」

1949年帰日。茅ヶ崎でバイブルクラスを持ち宣教する。

そして、1964年1月25日茅ヶ崎にて昇天。

残されたのは聖書とごくわずかな身の回り品だけだった。まるでウェスレーと同じように。

25歳で未知の国に宣教にやってきて生涯を宣教に捧げたミス・ハジスは、国境という枠を超えた、まさに「エキュメニカルなメソジスト」だった。

1964年2月8日、ミス・ハジスの成美学園葬がとりおこなわれた。式は元日本メソジスト教会監督、阿部義宗の祝祷で終わる。

美普の「最後」を共に生きた阿部の祝祷は、日本における美普教会そのも

³⁶ 前掲『わたしたちのハジス先生』 178～180頁

のへの終焉だったのかもしれない。

結語

日本においてあまり注目されていない「美普教会」という小教派の消長をとりあげた。確かに美普は横浜と名古屋の二つの教育機関を中心とした規模の小さな教会だったが、明治期の廃娼運動など社会運動への貢献だけでなく、その年会員から今日の神学教育における指導的立場の者も生み出しており、日本の基督教史の中で決して小さな存在ではなかった。

米国美普の最大の存在理由はメソジストの監督制を民主化させたことにある。確かに米国の美普は現存する「合同メソジスト教会 (UMC)」にこの点で十分貢献し、その110年間の歴史的特質を引き継ぐことができた。では、日本の美普は日本基督教団に50年間の歴史的特質を引き継げたのだろうか。

結論としては「否」であろう。

小論ではミス・ハジスという一人の女性宣教師にスポットライトを当ててみたが、ハジスに関する資料が少なく、また、筆者の力不足から深く掘り下げることができなかった点お許しいただきたい。

筆者がどうしても気になるのは、日本の教会合同をミス・ハジスたちアメリカのメソジストがどうみていたかということだ。

美普教会は名古屋中心の「同族的情緒的集団意識」の強い教会だった。しかし、それでは日本メソジスト教会や旧日基、組合教会など、日本のプロテスタントの主流派はどうだったのか。外国人宣教師の目から見れば、彼ら主流派は、エディンバラ世界宣教会議に出席した4人に代表されるような、明治期士族のリーダーたちによる、ナショナリズムの強い、単に美普の「名古屋性」を「日本」という国に拡大しただけの「士族的情緒的主流派意識」のかたまりに見えたのではないか³⁷。

³⁷ 結局のところこれが「日本基督教団のDNA」であり、明治大正期の遺伝情報が

残念ながら、ミス・ハジスがこの件に関して残した記録は発見できない。ここではアメリカのメソジストを代表して、エキュメニカル運動の指導者、R・モット博士の出版物から引用したい。

「(教会の) 合同が討議されている場合、教会が一方では同じ国内の他の教派と合同するか、また他方では世界中の同じ教派の教会とのつながりを保つかを選択する必要がある。経験から明らかなように、さまざまなキリスト教会が所定の地域でキリスト教運動にもたらすダメージは非常に大きいため、教会の地域的な合同は、通常該当する教会の主義を侵略せずに達成するのが望ましい。しかし、地域的または国家的に統一された教会の理想には、ある種の危険を伴うことも認識しなければならない³⁸。」

日本のメソジストは、戦後にもう一つの選択肢、「世界中の同じ教派の教会とのつながり」を選ぶことはできなかつただろうか。メソジストはウェスレーのepiskopeのもと、「日本にひとつ」であるだけでなく「世界中にひとつ」であるべきではないか。日本メソジストと美普が合同し、さらに福音、同胞も合同し、それぞれの歴史的特質を引き継いでUMC（ユナイテッド・メソジスト・チャーチ）日本年会を組織していく。その上で、「無条件合同」ではなく、信仰、職制について十分な協議をしたうえで、他の教派と合同していく……。それが、日本の宣教のために命を捧げたアメリカの宣教師たちにとっての理想の合同だったのでないか。

(日本基督教団横浜本牧教会員)

日本基督教団の細胞の核内に折り畳まれているといえるのではないか。

³⁸ R. モット「Methodists United For Action」1938年122頁



* 写真の説明

「第50回美普教会年会」

1941年3月に日の出町教会（現蒔田教会）を会場として開催された第50回美普教会年会の記念写真。

前列向かって左から二人目がミス・ハジス。

前列中央5人がけの真ん中に座っているのが「年会長」の小泉要太郎。その右が日本メソジスト教会監督阿部義宗。

このとき、美普は事実上日本メソジスト教会中部教区となっており、本来なら監督阿部義宗が中央に座るべきだろうが、このような配席をとったことに美普年会在継続していることへの美普のこだわりが感じられる。

結局美普は、日本基督教団創立後も51回、52回と「美普年会」を続けていた。

別紙

1939年の美普教会						
当時の教会名	現在の教会名	教会員数	牧師	牧師出身校	神学校	牧師婦人が英和出身
豊分 東京	広尾 東美	63	伊藤与雄	名古屋中学	関学 青学	◎
		73	水野正巳	名古屋中学		◎
横浜第一 日の出町 平塚 茅ヶ崎 伊勢原 鶴見	横浜本牧	257	酒井長吉	名古屋中学 名古屋中学 名古屋中学 名古屋中学	青学	◎ ◎ ◎ ◎
	蒔田	483	小泉要太郎		東北	
	平塚	157	大橋昌丸 (小泉)		青学	
	2教会分裂	85	高橋秋蔵 (伊藤)		東北	
	伊勢原 鶴見	63			関学	
静岡 浜松 清水 鷹岡 蒲原	静岡草深	111	宇佐美市平	名古屋中学	青学	
	浜松元城	82	志知信一	名古屋中学	関学	
	(清水)	80	貝沼捷二 (宇佐美)	名古屋中学	青学	
	吉原	142	(貝沼)	名古屋中学	青学	
	蒲原	41		名古屋中学	青学	
名古屋第一 中京 熱田	広路	229	小田士	名古屋中学	米国 青学	◎
	中京	713	ワーナー			
	熱田	72	松永徳次郎			
四日市	幸町	9	水野高次郎	名古屋中学	関学	